

# 萱

2020・4

# 風萱集

亀田虎童子

菜の花は捨てがたき花安房かづさ  
末黒野やきのふの人とすれ違ふ  
何故の長生き併あかぎれの世に育ち  
狼に咬まれし夢の痛かりし  
縄文の面影ありし黒揚羽

木村 嘉男

寒むや断腸食をたたれて二週間  
雑煮手に母きたまえり夜の雪  
喜々として蝶に呆然として雪が  
蝶が雪か雪が蝶かや天降り来る  
縦一文字腹切りたれば春立ちぬ

小島 良子

鍵穴に昭和の寒気残りをり  
枯葎雨の予報の出てをりぬ  
春寒やきれいに灯る大病院  
忌日来る昭和の寒さ引き連れて  
枯山のうしろへ下りる道のあり

出牛 進

暖かや孫のおもちやに模様替え  
春雨のたつぷり濡らす岩畳  
産土の三山座して霞みたる  
黄の色をゆつくり溶かす春日かな  
きさらぎや今朝の空なる望の月

松下 道臣

血圧の大きな数字初しぐれ  
なめこ汁呂律の乱れたしかめし  
消えさうになりし焚火を持ち上げる  
転がる葉音を立てだす冬はじめ  
掛布団いじけるやうに引つ張りぬ

# 萱集

進選

唐梅の観音堂に日をあつめ  
暮れてなほ心うきたつ春来る  
野水仙雲ひとつなきけふの空  
老猫の散歩をこぼむ余寒かな  
ゆくりなく上野の山の初桜

東京 谷田貝順子

強霜を踏みゆく音の来て去んぬ  
かくとだに翳をうつせり水面鏡  
ペチ力燃ゆおのおの情ほどけゆき  
寒暁や結露の中に都市の塊  
赤錆の錨を打ちし海鼠舟

東京 根來 隆元

白梅のひときは冴ゆる後楽園  
借景は東京ドーム梅薫る  
蕾固き臘梅微かに香をはなつ  
いぬふぐり淡きひかりの神田川  
整然と並びし蔵書冴返る

東京 加倉井たけ子

しんしんと雪降る夜は緑酒酌む  
鳥雲に踵を返す事も無く  
雁木道晴れ着の映るガラス窓  
凍空へ矢筋の如く送電線  
浮寝鳥楽譜の如く浮き沈み

東京 野村 宏

初日の出待つ遠くから貨車の音  
筑波嶺の殊に紫大旦  
白鳥の涎垂らして寄つて来る  
人形のやうな子膝に初電車  
病得て書くこと増ゆる初日記

千葉 光成 敏子

曇天に見つけましたよ梅二輪  
二晩のショートステイよ春浅し  
フレイルを抜け出したくて春の町  
一番星早春のベランダに立つ  
一人来て思ひがけない枯野かな

東京 飯塚トシ子

大根のしみじみ炊けて三千院  
塩鮭のかまを求めて列をなす  
林道の緩やかとなり冬苺  
気のせい目札するは雪女  
倒木の足を投げ出し冬の川

埼玉 新沢 伸夫